

2022 年度スペイン語劇紹介

Bodas de Sangre —血の婚礼—

榊原璃々 松原咲 （国際社会学部スペイン語科2年）

こんにちは。2022 年度外語祭スペイン語劇代表の榊原璃々と監督の松原咲です。記念すべき第 100 回目となる今年の外語祭で上演するのは、スペインを代表する劇作家であるフェデリコ・ガルシア・ロルカ作 "Bodas de Sangre" (邦題:「血の婚礼」)です。

ロルカはスペインのグラナダ出身の詩人・劇作家であり、20 世紀におけるスペイン文学最高の作家のひとりとも言われています。ロルカは 1919 年、21 歳にして故郷のグラナダからマドリッドへと移りました。その地で画家サルバドール・ダリ、映画監督ルイス・ブニュエルなどをはじめとする、多くの才能ある若い芸術家たちと交友を深め、充実した日々を 10 年近く送りました。1928 年、詩集『ジプシー歌集』の出版をきっかけにロルカの名は広く知られるようになります。その後のアメリカ合衆国とキューバへの訪問を境にロルカは演劇にも情熱を注ぎ始めます。自身が設立した劇団で古典劇の普及に努める傍ら、自らの戯曲の上演も意欲的に行っていきます。こうしたなかで、彼の代表作かつ三大悲劇として知られる『血の婚礼』『イェルマ』『ベルナルダ・アルバの家』をはじめとする悲劇の数々が生み出されてきました。しかし 1936 年、スペインは暗い内戦の時代を迎えます。リベラルな作品を描くロルカはフランコ政権から反体制派と見なされ、遂にはオリーブ畑にて銃殺されてしまうのです。享年 38 歳という若さでした。その後のスペインでは、ロルカの著作はしばらく発行禁止となり、フランコ政権が終焉を迎えてからは再び評価されるようになりました。今でもロルカの作品は多くの人々に愛されています。

このロルカの代表作ともいえる戯曲のひとつが今回上演する『血の婚礼』です。物語は実際に起こった殺人事件をもとに書かれ、ロルカの手によって、はるかに複雑にそして抒情的要素が強いものとなっています。舞台は 1920 年代後半のスペインのアンダルシア地方のとある農村。結婚式を間近に控えた花嫁と花婿がいました。ところが、幸せに結婚し平穏に暮らしてゆくと思われた彼らは、花嫁の昔の恋人であるレオナルドの存在により運命を狂わされていくのです。レオナルドは既に結婚をして子どももいるものの、昔の恋人のことがいつまでも忘れられず、彼女が結婚すると聞くと頻りに様子を伺いに来ます。その事実を知らされた花嫁はひどく取り乱してしまいます。

いよいよ迎えた結婚式の朝、身支度をする花嫁の元にレオナルドが現れ、花嫁に対する自身の熱い思いを打ち明けます。花嫁は動揺し彼を拒絶しますが、どうしてもレオナルドへの気持ちを否定することができません。

一方、もうひとり物語の重要な役割を担う登場人物が、花婿の母親です。彼女の夫と一人目の息子、すなわち花婿の父と兄は、過去にフェリクス家の人間の手によって殺されていたのです。花婿の母親は溺愛する息子の結婚に喜ぶ一方で、花嫁の昔の恋人レオナルドがフェリクス家の人間であるということを知った時、怒りと憎しみが再びこみ上げてきました。

そうして様々な人々の思いが交錯するなか、執り行われた結婚式。なんとか無事に事が終わったように見えたのですが、式の後、花嫁の姿はどこにもありませんでした。月夜のなか花嫁とレオナルドは一緒に逃げてしまったのです。怒り狂った花婿は馬に乗り2人の後を追います。他方、花嫁とレオナルドが逃げ込んだ森のなかに、「月」と「老婆」が登場します。月は、花嫁とレオナルドは逃げられないと告げ、老婆は死を予言します。直後、花婿とその友人が森に入ってきます。友人は花婿をなだめようとしますが、花婿は鬼気迫る様子で花嫁を取り返すことを誓います。彼の腰には小さな短剣があります。花婿は一族の名誉のためにも花嫁を取り戻さねばならないのです。

一方、逃げたレオナルドと花嫁も激情の渦中にいます。実はレオナルドの手を引いて飛び出した花嫁ですが、森の中で彼に自分を置いて逃げるように言います。花嫁がレオナルドをどれほど愛していたとしても、彼らが共に行くことは叶わないのです。当然、レオナルドは花嫁を置きざりにすることはできない、と叫び、2人は森の奥へと消えていきます。まもなく、耳をつんざくような悲鳴が鳴り響き、ここで一度幕が閉じます。舞台上で直接的に表現されることはありませんが、月光が照らす森の奥、花嫁の目の前で、レオナルドと花婿は死んでしまったのです。彼らの携えた小さなナイフで。

再び場面がかわると、村で女たちが二人の男の死を嘆き、最終幕が閉じます。

一見するとこの物語は恋愛のいざこざがねじれた愛憎劇のように見えますが、実はそれだけではありません。表題に含まれている“Sangre”(血)とは何を表しているのでしょうか。ひとつは、小さなナイフによって死んだ2人の男から流された血、“Sangre”です。また、花婿の母親は自分の愛する夫と息子を殺したフェリクス家の人間であるレオナルドを恨んでいます。ここでは血筋という意味での“Sangre”が関係しています。さらに、花嫁の父親や花婿の母親は先祖代々の土地を受け継ぎ、家を守り相続していくことを強く望んでいます。自らの“Sangre”の継承です。このように、本作においては、“Sangre”というひとつの言葉の中に幾つもの意味が込められているのです。

さらに、登場人物らから幾度となく噴出される焦燥感、苛立ち、圧迫感や窮屈感からは、閉鎖的な村組織からの解放や、「女」や「男」としての役割・義務感からの解放が描かれていると考えられます。花嫁はどんなに否定しようとも、最後にはレオナルドを愛する自分を欺くことができませんでした。そんな花嫁を突き動かしたのはレオナルドへの愛

だけでなく、この村では手にすることのできない自由への欲求もあったのです。自身がおかれた環境や組織、性別もしくはジェンダーといった社会的な枠組み、いわば人間の社会が形成する「檻」からの解放を求める人間の姿を感じ、見つめることができるのも本作の大きな魅力のひとつであると言えるでしょう。

以上、「血の婚礼」のあらすじ、及び作品としての特性や見どころをご紹介させていただきました。今回劇を作っていくにあたり、この場を借りてご挨拶させて頂きたく思います。

まず、物語の奥底に絶えず流れている「血筋」という概念は、我々含め現代日本に生きる多くの人々にとって、日常生活の中では薄まりつつある感覚であると思います。私達にとって、劇中に現れるロルカの世界観や訴えを汲み取ることは、作品理解の段階から困難の連続です。そこで作品理解において、現在に至るまで先人達が積み上げてきた数々の解釈や研究を頼りとしながらも、同時に、物語に流れる感情に、役者を中心に、私達自身から近づき感じようとする姿勢を大切にしていきたいと考えています。そうして、「演じる」、「舞台を創る」という行為を通し、私達自身にとっても、そして私達の舞台に訪れてくださる方々にとっても、ロルカが描き出そうとした人間社会や、その渦中で翻弄され葛藤しながらもがき続ける人間たちの激情を感じる体験になれば幸いであると思い、尽力してまいります。

また、今回の語劇制作は私達のほとんどにとって、舞台を創るという初めての経験であり、常に試行錯誤を重ねながらの挑戦となります。至らない部分の多々あることを痛感する日々ですが、私達大学生ならではの若者らしさも組み入れつつ、充実した舞台に練り上げようと、練習を重ねています。

なお、今年度の語劇も、新型コロナウイルス感染防止策として、昨年度に引き続き対面・オンラインの2形態により上演・配信する予定となっております。窮屈な時期が続きますが、是非、私達の劇へ足を運んで頂ければ嬉しく思います。皆様からの温かいご期待・ご声援の程、どうぞよろしくお願い致します。

鑑賞方法：プロメテウスホールでの対面上演/オンライン配信

上演日時：11月23日(水)(祝) 16:00~ 16:45

今後の予定や変更点等、詳しくはこちらの外語祭公式サイトをご覧ください。

GAIGOSAI WEB

<https://gaigosai.com/gaiyo/outline/>



監督と指示を聞くキャスト陣



舞台での稽古風景